

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

兄弟姉妹

——マルコ伝第3章31～35節——

1964年7月12日

小池辰雄

一体誰のことか なぜ私を尋ねるか 二重構造 靈戦 棄てる者は受ける 第一義の内容 親族・神族・信族 逆説的な構造 逆説的な構造 聖意を体現する者 円現への実存 本当の再結合

【マルコ3・31～35】（私訳）

³¹それから彼の母と兄弟たちが来る。そして、外側に立って、彼を呼びに人を彼のみもとに遣わした。³²ときに、群衆がイエスを囲んで坐っていたが、彼らは彼に言う、「ごらんささい、あなたのお母さんと兄弟たちと姉妹たちが外であなたを捜していますよ」。³³すると、彼らに答えてイエスは言う、「私の母と兄弟たちとは誰のことか」。³⁴そして、環座して彼を囲んでいる人たちを見回して彼は言う、「ごらん、私の母である。私の兄弟たちである」。³⁵神の御意を行う者は、誰でもその者が私の兄弟であり、姉妹であり、母であるのだ」。

●一体誰のことか

このまえ、「ベルゼブル」のことがちよつと出ておりましたが、「ベルゼブル」というのは——或いは「ベルゼブブ」とも言いますが——これは意味がどうもはつきりしないんですね。「ベール」というのは、「バール」というフェニキアの方の神さまでです。フェニキア人の神さまを異邦人の神というわけで、イスラエルの方でこれはどうも本当の神ではないと。それで、サタン的に考えまして、「サタンの親玉」というようなことにだんだんやってきたようです。これは旧約学者がそういうことを言う。「ゼブル」というのはわからないんですが、大体、「デアボロス」という、「間を分かつもの」という意味で、「分裂を起こさせるもの、分離させるもの」という、人と人との間を分かたったり、とにかく平和を乱すような存在です。サタンというものが、神さまと人間の間を分かたつ悪者であると、大体そういう意味をもっていると思像しているようです。

今日はマルコ伝3章の31節から35節までで、ギリシャ語としても大変やさしいところで、私の訳で読みます。

³¹それから彼の母と兄弟たちが来る。



「彼」というのはイエスのことです。よく現在形で書いてある。非常に躍如としている。

そして、外側に立って、彼を呼びに人を彼のもとに遣わした。³²ときに、

群衆がイエスを囲んで坐っていたが、彼らは彼に言う、「ごらんない、あなたのお母さんと兄弟たちと姉妹たちが外であなを捜していますよ」。³³すると、

彼らに答えてイエスは言う、「私の母と兄弟たちとは誰のことか」。³⁴そして、

環座して彼を囲んでいる人たちを見回して彼は言う、「ごらん、私の母で

ある。私の兄弟たちである。³⁵神の御意^{みこころ}を行う者は、誰でもその者が私の兄

弟であり、姉妹であり、母であるのだ」。

こういうところです。今日は「兄弟姉妹」という題をつけた。マタイ伝でいいますと12章46節から50節、ルカ伝でいうと8章19節から21節。マタイとマルコが大変似た並行記事です。ルカは少し簡単です。このマルコ伝ではその前に、身内の者たちが

「イエスはどうも気がおかしい。言うことを為すことが変わっている」

というわけで、これを取り押さえようとしてやって来たとあります。それで、イエスは肉親の者たちや親しい者たちからはどうも、白い目で見られ、あるいは誤解され――迫害とまでいかなくとも――そういう角度にいたわけです。お母さんのマリヤがその兄弟姉妹――「兄弟・姉妹」というのは両方とも複数になっていますが――を伴れてやって来た。家族は多かつたわけです。だいたい群衆があつて、これは戸外であるのか、あるいはイエスは家の中でみんなに話をしていたのか、あるいは取り囲まれて、その外側にやって来て、よく見えないという場合であるのか、ちよつとこれははつきりしない。多分、家の中でもあり、またそれが、戸が開けてあつて――満員なものですから――その外側かというようにとつてよからうと思います。「捜している」と言うんですから。それで、みんなが

「お母さんや兄弟や姉妹がやって来たが、あなたを捜してますよ」

と言つたわけです。そうしたら、

「母と兄弟とは一体誰のことか」

と、実にとぼけたようなことを言いなさる。

●なぜ私を尋ねるか

イエスのこういう気持は、これは既にルカ伝の始めの方にも出ています。ルカ伝2章の41節から過越^{すぎこし}の祝いのことが書いてある。

「41斯^{ふたおや}てその両親、過越^{なわがし}の祭には年毎^{としごと}にエルサレムに往きぬ。42イエスの十二

歳のとき、祭の慣例^{ならわし}に遵^{したが}いて上りゆき、43祭の日終りて帰る時、その子イエ

スはエルサレムに止^{とど}りたま^まう。両親は之を知らずして、44道伴^{みちづれ}のうちに居る

ならんと思ひ、一日路^じゆきて、親族・知辺^{しるべ}のうちを尋ねれど、45遇^あわぬに因^よ

りて復た^{また}ずねつつエルサレムに帰り、46三日のち、宮にて教師のなかに坐し、



かつ聴き、かつ問い給うに遇う。⁴⁷聞く者は皆その聡と答とを怪しむ。⁴⁸両親
イエスを見て、いたく驚き、母は言う『子よ、何故かかる事を我らに為しぞ、
視よ、汝の父と我と憂いて尋ねたり』⁴⁹イエス言いたもう『何故われを尋ね
たるか、我はわが父の家に居るべきを知らぬか』

イエスは十二歳のときであつた。両親は、イエスがまだエルサレムに在ることを知らな
いで、道連れだろうと思つて一日路を行つてしまひ、親族や知人のうちを尋ねたけれども、
どうもイエスの姿が見つからないものだから、またエルサレムに帰つてきて、三日の後に、
宮で教師たちのまんなかで、かつ聴き、かつ問つてゐるイエスに遇つた。両親はイエス
を見て非常に驚いて、マリヤが言うのに

「子よ、何故かかる事を我らにしたか。視よ、汝の父と私は憂いて尋ねて来た
んだ」

と。正に、ここにも「尋ねる」と書いてある。そうすると、十二歳のイエスが言うのに
「なぜ、私をお尋ねになるか。私は私のお父さんの所に居るべきを知りません
か」

と。この「べき」が強い「べき」なんで、

「居ないではいられないということが、あなた方、お父さんお母さんには分か
りませんか」

と、こういうわけです。こんなことを言う子どもなんていうものは、ちよつとこれは一万
人探してもいないようなわけです。

大体、福音書を見ても、パウロの書簡を見ても、キリスト教というのはちよつと人の気
持に逆らう、生まれつきの我々の気持に逆らうものが、正直あるわけです。こういうよう
なところを読んでいて、すらすらといかない。

「まあ、イエスだから、神さまの子だから」

と思つて、みんな我慢して読んでますけれども。生まれつきの我々の感情からいうと、も
しこれがイエスでなかったら、

「この野郎はやはりこういうところに欠陥がある」

なんて、みんなが批判するだろうと思う。

「よくお尋ねにいらつしやいました。すみませんでした」

くらいのことを言つてから、

「だけれども、私はこうなんです」

というように言うのが、常識的な言い方だと思ひますけれども。いきなり、

「なぜ、私を尋ねるか」

と。相手はヨセフとマリヤなのに、

「自分はお父さんの家に」



と言って、「神さま」と言わないで、

「父の家に居るべきを知らないか」

と言われた。ところが、

50 両親はその語^{した}りたもう事を悟らず。 51 斯てイエス彼等とともに下り、ナザレに往^つきて順^{したが}い事えたもう。其の母これらの事をことごとく心に蔵^{おさ}む。 52 イエス智慧も身のたけもいや増^{まさ}り神と人とにますます愛せられ給う。」（ルカ2・41～52）

ナザレに行つては、両親に従順に従つてつかえた。

「汝、その父母を敬え」

というモーセの十誡の第五番目の言をちゃんと守り、また

「人々に愛せられ給う」

と書いてある。ちよつと見ると、非常識なようなんですが、単なる非常識と違う。人間界の秩序というものがある。その秩序をキリストはなにも無視するわけではない。

●二重構造

神の秩序と人間界の秩序と二つある。ニュートンの法則に対して新しい物理学はアインシュタインの法則だか何だか知りませんが、キリストは地上の人の子として――そのことは特別な意味をもっていますけれども、今私が言うのはその意味ではなくて――それから、神の子としての、二つの二重構造になっている。これが「受肉」ということなんです。

「神の子が人の子である」

というところに、この「受肉」という現実があるわけです。これも現実なんです。

もしこの人の子という現実をただ直線的に無視してしまつたら、これは世捨て人にならなければならない。山にでも入つてしまつて、世捨て人、隠遁者になる。ところが、キリストは決して世捨て人ではない。誰とでも交わつて、どんな人も相手にして、自分の敵のようなパリサイ人の家にも行つてご飯を食べたり、まあ実にそういうところは、どうも無法則のようなものです。何だかちよつとも、主義も方針もない人間みたいですよね。主義も主張も方針もないような在り方。どうも一向、辻褄^{つじつま}があわない。何だか訳がわからないようですが、実はそれは大きな法則に従つてキリストは歩いていた。その大きな法則が見えないんです。読めない。

だから、両親のマリヤとヨセフも、十二歳のイエスのこういう言葉に躓いてしまつて、「悟らず」という。時々、神の子の現実を率直にそこでぶちまけるものですから、躓いてしまいうわけです。キリストの言葉を見ると、何でも説明がない。

「それはこういうわけである。こういうような条件であるから、こうである」

とか、条件付きだとか、後から付加して説明付けるとか、そういうものの言い方をしないで、



ずばりずばりと本質だけを言っている。それで、いろんな註解が出てくるわけです。キリスト自身は註解はしない。それは譬話に註解もたまにはなさいますけれども、いわゆる註解というわけではない。

そういう、断言命法式な言い方、やり方をしている。やり方もそうだし、言い方もそうです。水を割らないで、神の国の法則に従って、ものを言い、また事を為す。けれども、彼はまた人の子として、ある時は涙も流し、またある時は叫びもし、我々の人間の普通の感覚をもつて、ものを食べもし、また葡萄酒も飲みました。いわゆる隠遁者として山の中にこもって、時々出てくるなんていうのではない。

●霊戦

ところが、ある時、時に応じて時に臨んで、非常に烈しい言葉をこのように、「なぜ、尋ねるか」と、お父さんお母さんに向かつてでも発せられる。だから、これはちよつと非常識で、気がおかしくなったのではないかと思われるのも無理もないわけです。

「どうも、ご迷惑をおかけしました」

ということは、キリストの心の中にはあるんです。そうではありますけれども、水を割らないでなぜそういうようにおっしゃるかというところ、キリストは第一義に生きていたひとです。

「第一義に生きる」

という生き方のためには稲妻のごとく、また雷の如く、時にあるわけです。

「御霊の言は両刃の剣の如し」
もろは つるぎ

という言葉がありますように。これが本当の戦い、霊的な戦い、霊戦なんです。それは父母のマリヤやヨセフに向かつての戦いであると同時に、いやそれよりも奥に、自分自身に対する戦いである。イエスは自分と戦う方です。彼は弱さを自分にもっている。思いやること能わざる者にあらず。深い思い遣りをもっている。同情心をもっている。共にその悩み苦しみ悲しみというものをよく思いはかることのできる人です。その知もその情もその意志も非常に深いものをもっている。イエスは、何か俗人離れしてしまったような、霞^{かすみ}ばかり食べて松の葉を食べて生きている仙人ではないんだから。洗礼のヨハネの方が少し仙人的ですよ。野蜜を食べたり、駱駝の衣を着たりしている預言者です。ところが、イエスはそういった預言者ぶりが何もない。

「断食をする時は、頭に油を塗って、断食したような顔をするな」

と言われた。逆に言う的一面、実に常識的なひとなんです。イエスというひととは、つかみどころがない。非常に常識的なんです。非常に繊細な感情をもっていて、人一倍、涙が深い。昔の預言者でいうと、エレミヤやホセアの如きがイエス型のひとですね。そうかと思うと、イエスにはまた、アモス、ミカ、イザヤといったような角度のものもある。あの預言者た



ちはみんなイエスの中に入っている。そういう、つかみどころがない。仙人ではない。自分自身に対して、イエスはその人間性、人間味というものに時々もの凄く戦われた。それをそのままそこにぶちまかれるというようなところがあるわけです。12歳のイエスにして既にそれが現れた。

「梅檀は双葉より芳し」
〔せんたん かんば〕

という。もつといろんな場合があつたと思うんですが、福音書にはあまりそういったイエスのいろんな面が書いてありませんけれども。

伝道を始めてから、いよいよもつてそういう面が現れている。マルコ伝6章を見れば、

「斯て其処をいで、己が郷に到り給いしに、弟子たちも従えり。2安息日になりて、会堂にて教え始め給いしに、聞きたる多くのもの驚きて言う『この人は此等のことを何処より得しぞ、此の人の授けられたる智慧は何ぞ、その手にて為す斯のごとき能力あるわざは何ぞ。3此の人は木匠にして、マリヤの子、またヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ならずや、その姉妹も此処に我らと共にあるに非ずや』遂に彼に躓けり。4イエス彼らに言いたもう『預言者は、おのが郷、おのが親族、おのが家の外にて尊ばれざる事なし』5彼処にては、何の能力ある業も行い給うこと能わず、ただ少数の病める者に、手をおきて医し給いしのみ。6彼らの信仰なきを怪しみ給えり。』(マルコ6:1-6)

と書いてある。物理の法則と違って、霊の法則の世界では、逆らう者は、これを神さまは放っておかれる。そういうわけで、イエスは故里では躓かれる。家郷におきましては、躓かれて理解されない。悟られない。いわゆる人間の子らしくだけ生きていくことは、キリストにはできない。申し上げている通り、イエスの生活の仕方は、第一義に生きるということですから。

カトリックの方ではマリヤを非常に奉つてしまつて、「神の母」というような言い方までします。マリヤは普段大したことはないらしい。だから、

「母とは誰だ」

なんて、キリストはとぼけたようなことを言つて、尋ねて来ても相手にしない。そういう突っぱねるということが、突っぱねて第一義に生きることがキリストの本当の愛なんです。

●棄てる者は受ける

このことは、やはり同じマルコ伝ですが、10章のところを見るとよく分かる。私がしばしば引用するところです。マルコ伝10章29節あたりから、

「29イエス言い給う、『まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、或は家、或は兄弟、あるいは姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑をすつる者は、



30 誰にても今、今の世の時に百倍を受けぬはなし。即ち、家・兄弟・姉妹・母子・田畑を迫害と共に受け、また後の世にては、永遠の生命を受けぬはなし。」

(マルコ10・29～30)

「棄てる者は受ける」

というんです。そういう言い方をしている。棄てる者は受ける。全部、親戚や何かを、親子や一番親しい者たちを棄てる者は、それは今度は逆に受けると書いてある。これは不思議なことです。即ち、突っぱねることが本当にそれを抱き込むことである。

神の愛というものは、霊界の秩序を、そして人間界の秩序を決していい加減にするのではなくて、そこには秩序があります。その秩序をただ直接的に生かそうとしたって、それはなかなか生きないで、人間の世界はしょっちゅう罪でもってゴタゴタするわけです。その人間界の秩序を本当に生かそうとするならば、霊界の秩序をそこに本当に立てるときに、今度は人間界の秩序が霊的な質をおびて生きてくる。直接に生きるのではない。これが霊的な質をそこに受けて、今度は本当に生きてくる。

「棄てる者は生きる」

と言ったのは、そのことなんです。

「わがため、福音のために、その人間界の秩序をいっぺん棄ててしまう者は、その関係をいっぺん切ってしまうものは、逆に今度は霊界の質をもつてそれを受けとって、それを本当に祝福されたものに取り返すぞ。今までよりもっと素晴らしい世界にするぞ。」

と。そのことは事実、キリスト自身が証明している。使徒行伝1章のところに、

「14 この人々はみな女たち及びイエスの母マリヤ、イエスの兄弟たちと共に心を一つにして只管^{ひたすら}いのりを務めいたり。」(使徒行伝1・14)

とある。マリヤもイエスの兄弟姉妹たちもみんな、イエスが十字架されてそれから復活して、それからみんな目が醒めた。

「あれは本当だ」

と。それでみんな立ち返った。立ち返って、そして祈りを他の人たちと一緒ににしていた。やがて、ペンテコステを迎えるわけです。突っぱねたイエスは逆に、御霊をもつて霊界の法則をもつて、本当の母とし本当の兄弟とし本当の姉妹とした。そういうわけです。

真の深い天的な愛の貫く世界は、そこにどんなに雲がかかってこようが、嵐がそこに吹きまきまろうが、或いは雷が鳴ろうが、稲妻が光ろうが、その奥には天的な霊気が、吸引力が、愛が動いている。そういう愛のないものは、ただ分裂してしまうだけです。本当の愛のある世界は、それがどのようににその時に爆発しても、それは本当に嵐の後の、雷雨の後の、すがすがしきみたいになるわけです。神の怒というものはそういうものです。神さまの怒、神さまのそういった烈しい義の言というものはそういうものです。預言者アモスが烈しい



ことを言いました。けれども、その預言者アモスの烈しい言葉の奥に実は深い愛が隠されている。それをホセアにおいて神さまは表したもうた。

●第一義の内容

お母さんや兄弟や姉妹は一体、何を考えているか。悪くはない。みんな結構です。それぞれ、することをし、平和に暮らしている。けれども、イエスの目から見ると、ある一つのこと

が欠けている。

「神の国とその義を求めよ」

とキリストが言われた。

「³¹さらば何を食^{くら}い、何を飲^{のみ}み、何を著^きんとて思い煩^{わづ}うな。³²是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給うなり。³³まず神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加えらるべし。³⁴この故に明日のことを思い煩^{わづ}うな、明日は明日みずから思い煩^{わづ}わん。一日の苦勞は一日にて足れり。」(マタイ6・31～34)

神の国とその義というのが、キリストにとって第一義の内容であつた。我々クリスチャンにとって、第一義の内容とはイエス・キリストそのものである。「第一義に生きる」ということは、別な言葉でいうと、「キリストに生きる」ということです。キリストに生きるということとは、「福音に生きる」ということと同じです。

その点のねらいが、その点の中心が、そういう焦点が、お母さんや兄弟姉妹たちの在り方に——ここにお父さんヨセフのことは書いてないので、ヨセフは多分もう他界してしまつて居ないのだろうと学者が想像していますが——一番キリストが求めて、

「それだけはなければダメだよ」

というものが、それだけが欠けているんです。

「我、火を投ぜんために来たれり」

というのがこの第一義のことなんです。第一義とは、もう一つ内容的に言えば、聖霊のことです。第一義的な内実は何かという、この聖霊のことです。

「この火燃えたらんには何を渴望まん」

と言う。この火を投じに来たものだから、嫁は姑と分裂するし、家の中はゴタゴタになる。それはいわゆるスキャンダルではないですよ。いわゆるスキャンダルみたいな妙なゴタゴタではない。次元の違った絶対次元なものがその中に投入してきたから。何か化学的な薬品を入れてかき回すね。ああいうふうになる。けれども、それは全体をその投入されたものによつて化してしまう。それは冷たき平和ではない。熱き平和になる。いい加減な、生ぬるい平和というのがたくさんありますよね。事なかれ主義というやつ。事があるんです、この福音が来ると。事が起きるんです。起きるが、しかし、それは本当の平安の世界に入



るためである。我々は躓いたり転んだり、さまざまでございますが、しかし、この第一義に自分の魂を打ち込んでいく。

●親族・神族・信族

キリストは親族の者をいい加減に取り扱ったようだが、決して然らず。神の族、神族、を問題としている。神は信に通ずる。信族、信仰の族です。信仰の族であることを問題とする。私たちはみな信族です。この兄弟姉妹というのは信族です。「母」と言おうが、「父」と言おうが、何と言おうが、同じことです。親子、夫婦の関係、みんなこれは深い意味においてこの信族です。

この信とは、その中に本当に身を投じ入れたところの在り方が信です。また、御霊を受けたところに本当の信がある。御霊が来てないと、いくらいわゆる信仰と言いましても、これはヘタすると、

「誰々さんはどうのこうの」

とすぐ人を批判して、そして、どこの集会も教会もそんな波が立つ。しかし、本当に御霊を宿していれば、お互いさまに光つていくところのその御霊の火が見える。皆さん一人ひとりの顔の中に、これが言わず語らずのうちに光つていけば、もう楽にお互いに信頼できる。御霊は人を審かない。御霊はキリストに在って、人を互いに背負っていく。互いに担っていく。それが本当の愛です。そこはもはや、どのような第二義的なものが欠けておりましても、第二義以下のものが欠けておりましても、その集会は絶対に大丈夫です。

けれども、この第一義の御霊が宿っていないと、どうのこうの言って、第二義的なことが第一義的な問題となつて——第二義的な問題をいい加減にしろと言うのではない。大いにいろんなことを考えて、大いにやっていると。やるべきです——けれども、第二義的なものが第一義に知らないまに切り替わりますと、集会はおかしなことになる。

私たちは、どうせ人間なんてものは特殊な存在であり、欠陥だらけの存在です。それをなお、そのような相対的現実でありながら、「絶対に」という世界はこの御霊です。この御霊の連なる世界です。御霊が連なつて、環在して円形をなしている、皆さんはみな一粒一粒の赤い珠だ。これが円形をなす。中心にはキリストという驚くべき太陽がある。太陽の回りを回っている、回転しているような、そういう状態です。そういう状態にあるものは、みんな太陽からの引力に入っている。神の国とその中心のキリストというものを求め、それに引張られている。それに引張られ、求めているところの各々は回転せざるを得ない。集会がこういうことになったら、みんな一人ひとりとはみな八方破れでも何でも大丈夫です。

ところが、一人ひとり非常に完全なようでも、これが無かったら、結局、パリサイでもって終わる。私たちのこの集まりというものが——言葉ではダメですよ、言葉ではいくら整つたってダメです——問題は、この胸の中に聖霊の火が、福音書を読んでキリストの言動から、



読めば直ちにグッと来るような世界を自分の現実として来たら、そうしたらばお互いに

「はい、結構です」

と、みんなお互いに本当に赦し担っていく、そういう存在になる。

それが本当の親族です。それが本当の親しい族となる。相対的現実の親族が、新しい意味で、この親しいという字が新しい意味を持ってきます。そのために、キリストは烈しいことを、躓きのようなことをおっしゃるが、

「しかし、それは水が割れないんだよ。私の中のこの悲願が分かるか。本願が分かるかね」

と。この第一義をもってぶつかるとき、もはや左顧右眄もないという世界に皆さん一人ひとりが入る。

●逆説的な構造

私は今度の夏の集会で——何も武蔵野の幕屋に限ったことではない。東西南北から来る皆さんと本当に私たちはキリストのエクレシアである——そこを展開していく。そして、喜び勇んで日本全国に散っていく。大きな見えざる——見えないけれども、一番具体的な——エクレシアというものを限りなく展開していく。分裂ではなくして、展開です。皆さんもそのうちに大いに方々で幕屋を開いてくださいよ。そして、大きな展開をしていく。私はたった独りここに残っている。本当ですよ。

親鸞も

「私は弟子を一人も持たない」

と言った。そういう世界に本当にお互いの大きな連なりと、何ものも切ることのできないこの信族が展開する。正にこれは霊族であり、霊界の法則でありまして、それはまた、この人間界の秩序も立派に保っていく。それが本当に立派に保つ。真理というものはそういうものです。片一方を切ってしまうようなものは本当の真理ではない。いっぺんそこが断たれたように見えて、実はそれは本当に生きる。これは人間の相対的現実というものがそういう罪の現実であるものだから、どうしてもそういう構造になる。それが一面的な、もう罪のない世界になれば、これはもう直線的にすべてがいく。それは神の国に行つてしまえば。けれども、この罪の世界においては、どうしても、そういう逆説的な構造になつて、そいつを掴んでいくという、これが本当の信仰の現実です。

相対的にはみな結構なんです。けれども、イエスは、

「それではダメだ。この第一義的なものを求めよ」

と言う。しかも、神さまの第一義を求めないで、相対的な立派さというものを大いにかさにきてやっているパリサイに対しては、真つ向から

「汝ら、偽善者よ」



と言う。キリストは、パリサイ人よりもはるかに素晴らしい義人である。けれども、

「私は何ものでもない」

と言われる。何ものでもない人が一切をなしていく。これは、第一義に生きる人の角度なんです。何だか知らんけれども、火山が爆発するような、また泉が湧くような事態が、皆さん一人ひとりの胸に迸ってくる。それが聖霊の事態なんです。

無情のようであるけれども、キリストは無情どころではない。本当の天地有情^{うじよう}なんだ。『天地有情』というのは土井晩翠^{ばんすい}の詩集だ。昔、私は非常に好んで読んだ本です。キリストこそ本当の天地有情の人なんです。けれども、その地の無情を天の有情をもつて覆ってしまう。そうしたらば、棄てたと思ったものは実は、本当に正しい意味においてそれを生かすということです。

イエスは十字架の上からヨハネと母を見て、何と言われたか。

「これはお前の母だよ。これはお前の子だよ。よく親しくしておくれ」

と。キリストは深い心をもって、天的霊的な秩序をもって、この人間界の秩序をもつと素晴らしいものにする。本当の親子が親子となり、本当の夫婦が夫婦となる。本当の兄弟が兄弟となる。それから、誰でありましても、これは兄弟姉妹、これはお母さん、これはお父さんというような具合になってくる。

内村鑑三先生が、お孫さんができてね、だいぶ可愛くてしょうがないものだから、

「先生はどうもこの頃、神さまを忘れている」

とかなんとか誰かが言ったのを先生は聞いて、肅然と色をなして、

「私がイエス様よりも正子を愛するということか。それは大変なことだ」

と言って、自分を戒められたということです。そこが即ち、内村先生という人は、なかなか多角的な方で、常にこの第一義を忘れないでいらっしゃった方です。

●何の関係あらんや

もう一つ例があったので引用しましょう。ヨハネ伝2章のところ、あの婚宴のところ、婚宴で葡萄酒が尽きてしまった。

「³葡萄酒つきたれば、母、イエスに言う『かれらに葡萄酒なし』⁴イエス言

い給う『おんなよ、我と汝となにの^{かかわり}関係あらんや、我が時は未だ来らず』」（ヨ

ハネ2:3～4）

ひどいものですね、

「女よ、我と汝と何の関係あらんや」

と。これも、お母さんに向かって、とんでもないことを言った。これもイエスは、どこまでも第一義でありました。今、神さまが自分に或る大事な時を待っておられる。その時をキリストはちゃんと知っておられる。大事な瞬間を。そういうお母さんの思い煩いと言



ますか、婦人らしい親切さ、それはよく分かるんです。それを決して否定しているのではない。けれども、「何の関係あらんや」と言つて、この母の人間的な同情というものをそこで切つてしまつて、そして、神さまの発動なさるところのその事態に「よしつ」とキリストは時を待つて、為すべきことを為し給う。お母さんが

「どこからか、少しは持つてくるか」

なんて思つたら、どこからか持つてくるどころではない。水が葡萄酒に変わつてしまつたという。そういうなさり方です。

そうかと思うと今度は、ヨハネ伝7章3節に、

「³兄弟たちイエスに言う『なんじの行^{わざ}う業を弟子たちにも見せんために、此処を去りてユダヤに往け。⁴誰にても自ら顕れんことを求めて隠^{ひそ}かに業をなす者なし。汝これらの事を為すからには己を世にあらわせ』

と。「なかなか不思議なことをやるから今度は世にあらわせ」と、逆に今度は勧めたわけです。

⁵はその兄弟たちもイエスを信ぜぬ故なり。⁶ここにイエス言い給う『わが時はいまだ到らず、汝らの時は常に備^{そな}われり。⁷世は汝らを憎むこと能わねど我を憎む、我は世の所作^{しわざ}の悪しきを証すればなり。』(ヨハネ7:3～7)

キリストは、

「今はエルサレムの方に行く時ではないと。やがて、公然と乗り込んで行く時が来る。それは自分が十字架につく時だ。それはまだ今は早い。」

と。これはみんな、キリストが霊的法則に、神の御意に従つて生きているからです。

「大いにその不思議な業を現して、新興宗教的にやったらよからう」

と、片一方は思つたわけです。けれども、それはダメだ。そういうことではない。キリストはいつも、サタンとの一騎打におきましても、霊的な力を自ら私なさらなかった。

●聖意を体現する者

そこで、その後にくるキリストの言葉が大事なんです。

³⁵神の御意^{みこころ}を行う者は、誰でもその者が私の兄弟であり、姉妹であり、母であるのだ。

「神の御意を行う者は」という言葉です。

「神の意志を行ずる者は、聖意を体現する者は」

ということ。私は主の祈りを「聖意体現」という表題で書きました。私はあれで、アルファでオメガと言つてもいい。私は何年伝道しても、煮詰めれば聖意体現の他にないわけです。

「神の御意を行う者は」と。キリストが「行^なう」と言うのは、単なる行為ではない。

「聖意を体現する者は、御意を行う者は、誰であろうとも、その者が私の兄弟であり、姉妹であり、母である。」



と。「兄弟、姉妹」は、ここところは単数で書いてあります。「母」のところは「私の」という字もない。要するに、「神の聖旨を行ずる者は」ということです。

マタイ伝7章に、

「²¹我^{むか}に対して主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。」（マタイ7・21）

「御意をおこなう者のみ之に入るべし」

とある。キリストの言葉を見てみると、虚心坦懐に読んでみると、「行う」という方がどうも多いようです。もちろん、「信ずる」という言葉も非常にあります。非常に大事な言葉です。ところが、「行う」ということもこれに劣らず、ヘタすると多い位に書いてある。それでは、「信仰と行為の関係はどうだ」

なんて、そんなことは決してキリストは言わない。イエスはそういうことは言わない。パウロはだいたいぶそくいうことを言いますけれども、ヤコブも言いますけれども、イエスは言わない。「信ぜよ」と言うときには、

「神の業は信^{わざ}ずる、これなり」

なんて言っつてね、「まあ、たまには行えなくてもいいけれども」なんて言わない。

「行^なう者だけが天国に入る」

と言われる。何か矛盾してしまっている。

大体、本当に生きた人というのは、みんなそういうような質^{たち}の人です。内村鑑三先生もそうです。昨日、

「東北は日本のしつぽである」

なんて言うかと思えば、今日は、

「東北は日本の首^{かしら}である」

なんて言っつてみたり。非常に矛盾なことを言う。昨日、

「神さまは義である」

と言え、今日は、

「神さまは愛である」

と言う。もちろん、内村先生は神学的な角度からの解明をなさらないことはない。大いに内村鑑三全集がキリスト教の教義の所を解いた所もあるけれども、心いっぱい、魂いっぱい、

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして」

ものを言いたたものを為す人は、その瞬間、瞬間において全的にものを言うものだから、前後の関係で何か矛盾するようだ。けれども、それが実は奥の方から発しているものだから、奥の方にちゃんと辿ってみると、もの凄く有機体的な構造をなして展開している。もちろん、人間ですから、それが辻褄の合わないということもあるでしょう。けれども、その質からいうと、そういうものなんです。



●円現への実存

ナザレのイエスにおいては、彼は人間でありながら、完全に神の子ですから。正直、平面に並べたら、キリストの言葉というものはもちろん矛盾してますよ。平面ではないんだから。非常に有機体的構造をなしている。矛盾だけではない。非常な大きな全体をなしている。大きな全体であり、大きな調和をなしている。矛盾の統一とでもいうものです。

これが本日一生という生き方でもって、神の御意を行ずるところの在り方です。だから、

「天の父の御意を行う者だけが、神の御意を行う者だけが、神の国に入る」

「行う者が、これわが兄弟、姉妹、母であり、子である」

と言われる。

「さあ、困ったな。私はそんなに行えないから、皆さんと兄弟姉妹になれないかな」

なんて。もし、私にそういう意味で要求されたら、私はもう落第生だ。けれども、私は決して落第だと思わない。それは行えるんだから。

「行える」ということは、何も結果を言っているのではない。霊的な御霊が来ている人は、どんなに八方破れでありましても、惨憺たる者でありましても、必ずこれは円現していく。円現への実存です。そのことでは、私は一步も退かない。そのことで、何と人に言われようが、絶対に退かない。円現への実存という確信は、キリストの恩寵が与えている確信ですので、私の信仰ではない。キリストの十字架の救い、その聖霊の恩寵が、復活の生命の恩寵が、皆さん一人びとりに真に一番深いどん底の現実として来ているならば、それが信、行、如、ということ。そういつたものを受けとっていることが「信」であって、「行」は必ず展開していく。信ずるということと行うということが一つです。行うということが何か律法のように響いてきたらダメですよ。それは本当に福音を受けとっていない。

「行うことが楽しい。行わなければ力が出てこない。力があるから、行いに展開する。

行っているから、力が出てくる。」

といったようなわけです。そういうように、皆さん一人びとりが展開していく。

私はダメな男ですからね。

「私はこんなによくやっているのに、先生はひとつも認めてくれない」

なんて。そういうこともあるかも知れませんか。私は自己弁護をしません。けれども、どうか、御霊をもって行ってください。そうすれば、その人は、誰に認められなくても、この集会を本当に支えている人です。

●本当の再結合

とにかく、キリストの本当の本願といいますが、愛といいますが、その力を受けてきたら、もうそういう相対的な人間の毀誉褒貶というものが問題でなくなる。そういう魂になったら、知らないまに光が発してくる。どうか、そういう実存になってください。私がむしろ



ダメであればあるほど、あなた方には幸いである。先生が非常に立派だと、人間的に先生にみんな頼ります。そうすると、知らないまに先生中心になってしまつて、その集会は非常に良きそうだけれども、実は個々人の力が本ものでなくなってしまう。無教会は、今まで偉い先生ばかりが出てたものだから、ヘタすると、そういう欠陥がなきにしもあらずです。私みたいなダメなやつが、皆さんの一步先頭に立って歩いている。なんと惨めなものだろうと。けれども、そうであるから、いよいよあなた方が、そこで鍛えられていく。私の欠陥が実は本当の愛となってくる。そういう受けとり方を皆さんがしていけば、私は本当にありがたい。それをなさっていなかったなら、いつまでたつても、私もダメだが、あなた方もダメになる。

我々の今つかまされているこの福音の世界というものは、そういう第一義に生きるところの在り方です。だから、やめられない。だから、楽しい。本当に楽しい。そういう意味において、この人間界の秩序が、そういう霊的な秩序において更に深められ潔められ、熱くせられる。霊的な私たち兄弟姉妹というものは、やがて全部これは霊界に往つてしまうんだから。今度は本当に霊界の世界に、みんなが天界に移される。しばしの地上において、そういった霊的な信族です。御霊が在るところには即ち霊族であり、信族である。なお、ヨハネ第一書の2章15節に、

「¹⁵なんじら世をも世にある物をも愛すな。人もし世を愛せば、御父を愛する愛その衷^{うち}になし。¹⁶おおよそ世にあるもの、即ち肉の慾^{よく}・眼の慾^{まなこ}・所有の誇りなどは、御父より出づるにあらず、世より出づるなり。¹⁷世と世の慾とは過ぎ往く、然れど神の御意をおこなう者は永遠に存^{とこ}るなり。」(ヨハネ一2・15
17)

と。永遠に「とどまる」というのは「メノー」という字です。ここにも、

「神の御意をおこなう者は永遠に存^{とこ}る」

とある。永遠の世界に何を携えて行くことができるか。聖書だけは持つて行きたい。けれども、聖書も持つて行くわけにいかない。聖書は身につけて行かなくては。この文字は化体されている。まあ、聖書くらいは持つて行つてもよきそうですけれども、これも持つて行けない。聖書こそ本当に身につけていく。その他の一切のものはみんな過ぎゆく。

兄弟姉妹として、一切の人間の間からこの魂が本当に天界に救われるための、そういう祈りだけは持つていかななくては。そういう愛はもつていく。それが深い意味における「レリギオ」だ。本当の再結合だ。そういう魂は、私たちは独りで、誰でも独りで天界に行く。天界へ行くときは独りです。一緒に行こうとしたつて、そうはいかん。みんな一人びとりです。けれども、そういうようにして、みんな天国に入れられていく。

